

## さらば砂防会館 権力と公共事業のはざまで

戦後数々の政局の舞台となってきた砂防会館が閉鎖される。かつては政界の権力者が事務所を構え、“権力の館”と呼ばれてきた。つぶさに見てきた元建設官僚の証言。砂防会館 60 年の歩みを辿る。

老朽化に伴い建て替えられる砂防会館。引越し作業の際に 15 年前に行われた座談会の資料が見つかった。その座談会は元建設官僚を講師に招いたもので、必要な事業を実現するために何をしてきたか後輩達に語っている。講師を務めた中村さん（90）が建設省に入ったのは戦後復興の最中で、道路や橋の建設が公共事業の中心だったが山奥で行われる砂防事業は後回しにされていた。

砂防会館の脇に中村さんが師を仰ぐ“砂防の父”と言われる赤木正雄の銅像が建てられている。赤木正雄は戦前から砂防事業の発展に尽くし、水害に苦しむ市町村を支援してきた。中村さんは赤木から「砂防の原点は人命を守ること」と繰り返し叩きこまれたという。赤木が砂防協会の拠点として、1957 年に砂防会館を完成させた。しかし、全国で事業を進めるには予算がなく赤木は政治家への働きかけに力を入れる。

赤木が毎週のように国会議員と懇談会をしていた砂防会館の特別会議室を紹介。壁一面の硝子のエリーフに砂防ダムが描かれている。政治家からは人目につかない砂防は票にならないと敬遠されたが赤木は必要性を訴え、山奥の現場にも連れだした。中村さんは砂防予算を増やすために自分が頑張らなきゃダメだという赤木の信念だったと話す。

1959 年の伊勢湾台風で転機が訪れる。この翌年に政府は治水計画を打ち出し 10 年間で 9000 億円を超える投資を行うことになった。命を守るために今必要なのは砂防だ、と赤木は予算獲得に向け動き出した。赤木は砂防協会の会長を務めていた徳川家正に、田中角栄に陳情に行ってもらいたいとお願いする。中村さんの座談会の証言によるとあの頃の陳情といえばジョニーの赤か黒か 3 本くらい持っていくのだが、徳川は 500 円のお菓子を持って行き「これは私が初めて自分で買って持ってきました」と渡すと、角栄は「何者にも代えがたいお菓子だ」と各方面に吹聴したとのこと。中村さんは 500 円のお菓子など常識的に笑い者になるが、角栄は世が世ならば 17 代将軍になっていた徳川さんからもらったお菓子ということで感激していたという。

この陳情が功を奏し、5 年後に自民党の幹事長になっていた田中が砂防協会会長に就任したのだった。田中角栄は個人の事務所も砂防会館に移し、中村さんは予算の説明などで

事務所を度々訪れたという。田中から送られた色紙には「晩花密葉に蔵る」と書かれていた。砂防の仕事は人目につかないが、時間をかけて成し遂げようという意味で、言葉通り田中は成果をもたらした。中村は「角栄さんの PR 効果は絶対の力があった」と話す。陳情から 10 年砂防予算は 500 億円を突破。しかし田中角栄の政治力は砂防会館のイメージも変えていった。

当時、田中の番記者だった増山さんは砂防会館で目にしたのは金を目当てに政治家たちが通ってくる光景だったと話す。1972 年田中は自民党総裁選に立候補し、福田赳夫との派閥争いを繰り広げた。田中は中曽根の支持を取り付けるなど遂に田中角栄が総裁に決定する。その 2 か月後に赤木正雄が亡くなった。銅像を建てたのは田中だったとのこと。中村さんは砂防の予算が増えた一方で、政治家と付き合う難しさを感じていたという。

砂防会館でロッキード事件による緊急の記者会見が開かれた。田中角栄は受託収賄の罪に問われ、砂防会館にも捜査のメスが入り、会館のイメージは大きく傷ついた。中村さんは「誤解される姿ではあった」と砂防会館について話した。田中の事務所は閉鎖され、事件の 3 年後に中村さんは建設省を退職した。

砂防会館はその後も権力の館と呼ばれ、金丸信など有力な政治家が会長を引き継いでいった。公共事業費は毎年のように増加。かつて予算の確保に苦しんだ砂防は、新たな事業としてプールなど子ども達が遊べる砂防施設を各地に作られた。しかし公共事業に対する世間の目は次第に厳しくなっていた。

2001 年に構造改革を訴える小泉内閣が発足し公共事業の見直しが始まった。その直後に開かれたのが建設官僚たちの座談会で、中村さんが呼ばれ講師を行った。そこで中村さんは箱庭のような事業に苦言を呈し、近年の公共事業に「無駄な仕事が多いように思う」と指摘している。そして砂防事業のあり方についても一度原点に帰り見直す必要があると思うと話している。その後、小泉政権で公共事業は大幅に削減された。

5 年前に倒れた中村さんはリハビリをしながら忸怩たる思いが胸をよぎるという。それは各地で頻発する土砂災害・砂防ダムの整備が間に合わずに多くの命が失われている。公共事業の役割とは何か、中村さんは日本の経済を考えると公共事業には限界があるとし、「できるだけ災害防止 人命の防止」を主体にやっていくべきだと話す。命を守るために政治、権力と向き合った砂防会館の 60 年が終わろうとしている。解体工事は年内に始まり 3 年後に新たな会館に生まれ変わる。